
友達

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
友達

【Nコード】
N0408B

【作者名】
夕焼け

【あらすじ】
おっちゃん、俺たちはいつまでも友達だ。

僕にはホームレスの友達がいる。

彼との出会いは今から3年前の夏だ。

年は僕の親父と同じくらい。

汚らしいし、くさくし、下品な笑い方をするし、

駅の下の僕たちが歌ってる場所でいつも寝ちゃうし、

本当に困った奴だけど

でもとてもやさしいおっちゃんだ。

おっちゃんは多摩センターで僕らが歌っていると

どこからとも無くやってきた。

なんか最初の頃は色々話した気がするけれど、

何を話したのかは覚えていない。

僕たちに分かっているのは、彼には家が無いこと、

僕らと同じくらいの年のころにはパチンコばかりしてて気づいたら

そんな風になっちゃってたこと、

赤いニット帽がよく似合うということ、それだけだ。

名前もわからない。

彼はお酒を飲んでよく僕らの歌ってるところにやってきて、

僕らの後ろの地面ににごろりと横になり、

ぶっさいくな顔で僕らの歌う様を眺めていた。

大抵はぐでんぐでんに酔っていて、何かを言いたげに口をぐによごによ動かすんだけど何を言ってるのかは分からない。

僕の路上仲間は一人を除いてみんな彼をよく思っていないようだった。

路上仲間の一人である友人Tが僕にこう言った。

「あのおっさんは絶対犯罪犯してるぜ。

目がいつちゃってる。

まじで深く関わらない方がいいぜ。

俺にはわかるんだよ、ああいう人間は根っこが腐ってる」

ジョークではなく、本当にそう思ってるみたいだった。

そしてそんな事を言っていた友人Tが僕から彼女を奪い去っていったのは

それから僅か1ヶ月後のことだった。

僕がひとりで歌っているとおっちゃんがまたやってきた。

僕は

「友人に彼女をとられちゃったんだ、はは」

と言いながら自嘲気味に笑って見せた。

するとおっちゃんは大笑い。

あっはっは。

まじか。まじでとられちゃったのか！

あっはっはっは。

そんなに笑わなくなっただけいいじゃないかと僕は思った。
むっとして僕が歌いだすとおっちゃんは近くのコンビニに入っていた。

そして数分後ビールを二本かって戻ってきた。

そのうちの一本を僕に渡して、飲めよ、
とおっちゃんは言った。

まあ、そんなこともあらあな。

お前だっけなかないいい面してんだから
まだまだこれからいくらでもいいことはあるさ。

そしておっちゃんはまたげらげら笑い出した。

そして朝が来るまで駅の下で下品なシモネタを連発してた。

冬が来て、おっちゃんの赤いニット帽がなおさら似合う季節になった。

おっちゃんはよく暖かいコーヒーや弁当やカップラーメンをおごってくれた。

他の路上仲間から聞いた話だとかみ処理場のようなところで働いていて、

住むところを借りれるほどじゃないけれど、わずかばかりの稼ぎはあるらしい。

でもきつと住むところもないんだから、

僕たちに平気でおくれるほどあまつてゐるわけじゃないんだろう。

それでも僕らの前ではいい親父気取りで「食いたいもん食え！」っ

て言ってくれた。
おっちゃんが買ってくれたカップラーメンは本当にいつもうまかった。

多摩センターの駅が改装工事に入って、
僕たちの歌ってたあたりは封鎖されてしまった。
そしておっちゃんに会う機会もめっきり減ってしまった。

ちょうどその頃、僕もかなり貧しい生活をしていたから、
知り合いの働いてるコンビニで賞味期限切れの弁当をもらいにいく
ようになった。

と言ってもほとんどごみと一緒に夜中の2時過ぎに裏の物置に出さ
れた奴を漁って拾ってたから、まあ乞食みたなもんだ。

そこで偶然あのおっちゃんとはったり会った。

僕は髪がかなり伸びていたし、黒ぶちのごつついめがねをかけてい
たし、

何よりその場所はかなり暗かったので僕だとは気づかないようだった。
た。

おっちゃんもいつも廃棄を拾いにきていたのだ。

おっちゃんは言った。

「おう、お前も宿無しか、お互いこの季節は大変だよな。
身なりからすると新人か？」

おれはもう何年もこんな生活してる。

まあ、こういう生活をする上でなんか分かんない事とか困ったこと

があつたら俺は〇〇の橋の下にいつもいるからなんでも言つて来い。俺に出来ることなら何でもしてやる」

おっちゃんはやっぱりいいおっちゃんだった。

一緒に廃棄を漁っていると、

おめえは若けえんだから肉いっぱい食え！

っていつて希少なステーキ弁当とか色々僕の方によこしてくれた。

僕が色々あつて早い時間に取りにいけない時はおっちゃんが僕の分まで拾つておいてくれてて、それをこっそり奥の隠れた場所においてくれた。

多分僕が廃棄を拾うようになって、ごみが出る量が減ったことでお店にばれてしまったんだと思う。

コンビ二は廃棄を出さないようになった。

そしておっちゃんと会う機会はまためっきりなくなってしまった。あるときおっちゃんは言った。

「俺がこんななっちゃまったのも、まあ、自業自得さ。

確かについてなかったってのもあるだろうよ。

でもそれだけじゃない。

結局俺は俺のせいでこんなことになっちゃまったのさ。

だから、誰にどんな蔑まれた目で見られてもしょうがねえのさ」

おっちゃんが言うように、確かにそうなんだろう。

若い頃にパチンコばかりやってて、仕事もろくにしないで、やりたい放題やってこうなっちゃったんだ。

仕方が無いことだ。

路上で歌ってる時、汚物を見るような目でおっちゃんを見る人は少なくなくて、若者も、サラリーマンも、お姉さんも、かなり多くの人が「うわ、なんでこんなホームレスがここにいるの？」って顔で見てた。友人Tがそうしたように。

でもね、おっちゃんは優しかった。

自分だって食うもんも満足にないのに、僕らの事を気遣ってくれて、誰に蔑まれても文句の一つも言わないで、まるで、本当に親父みたいな人だった。

ある時使い古したギターのピックをあげたらおっちゃんすごい喜んでくれた。

ホントになきそうな顔で喜んでくれた。

「ホントにいいのか？本当に俺なんかにくれるのか？」って。その表情を見ると僕も本当に幸せな気持ちになれた。

おっちゃんは言った。

「でもいつかお前も俺のことなんか忘れちゃうんだろうよ。いつか社会にもっと深く関わるようになったら俺を蔑むようになってしまっただ。」

もちろん責めてるんじゃない。

でも大抵そうなっっちゃうんだよ」

きつと今まで何度と無くそういう体験をしてきたんだろう。

「おっちゃんのこと忘れるわけじゃないじゃんか、だって大好きなもの、友達なもの。多分俺は死ぬまでおっちゃんのこととは忘れられないよ」

「そうか、友達か。はっは、友達か、そうかそうか」

かみ締めるように何度も繰り返してた。

やんちゃな子供みたいに顔をくしゃくしゃにして笑いながら。

世の中には色々なことが起こる。

素敵なこと、理不尽なこと、楽しいこと、悲しいこと。

僕たちは翻弄されるままにただ昨日と明日をつないでいく。

矛盾した昨日と明日の隙間を埋める為にいくつかの嘘をつく。

自分に、他人に。

運良く幸せをつかんだ人、運悪く不幸に見舞われた人、

なるべくして幸せになった人、なるべくして地に落ちた人。

きつとどれも本当はたいした違いなんて無くて、

どれもが素晴らしい人生で、どんな人生の中にだって感動がある。

平等とはいえないけれど、心を振るわせられる場面はそこらじゅうに転がってる。

拾い上げて、埃を払ってきちんと心にしまってやればいつか絶対輝く。

忘れないで、あなたもきつとそういう宝物を持ってる。

心のどこかで呼び覚まされるのを待ってる。

きっと悲しみの全てを拭ってはくれないけれど、

それを引き連れて生きる為のちよつとした”たし”にくらいはなる。

おっちゃん、俺たちは友達だ。

誰がなんと言おうと、あなたがたとえ信じてくれなくても、僕はあなたを本当に好きだ。

あなたのおかげで僕は幾つかの絶望を払いのけることが出来た。

またいつか朝まで飲み明かそう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0408b/>

友達

2010年10月14日22時08分発行